

企画展 2025.2 - 2025.8

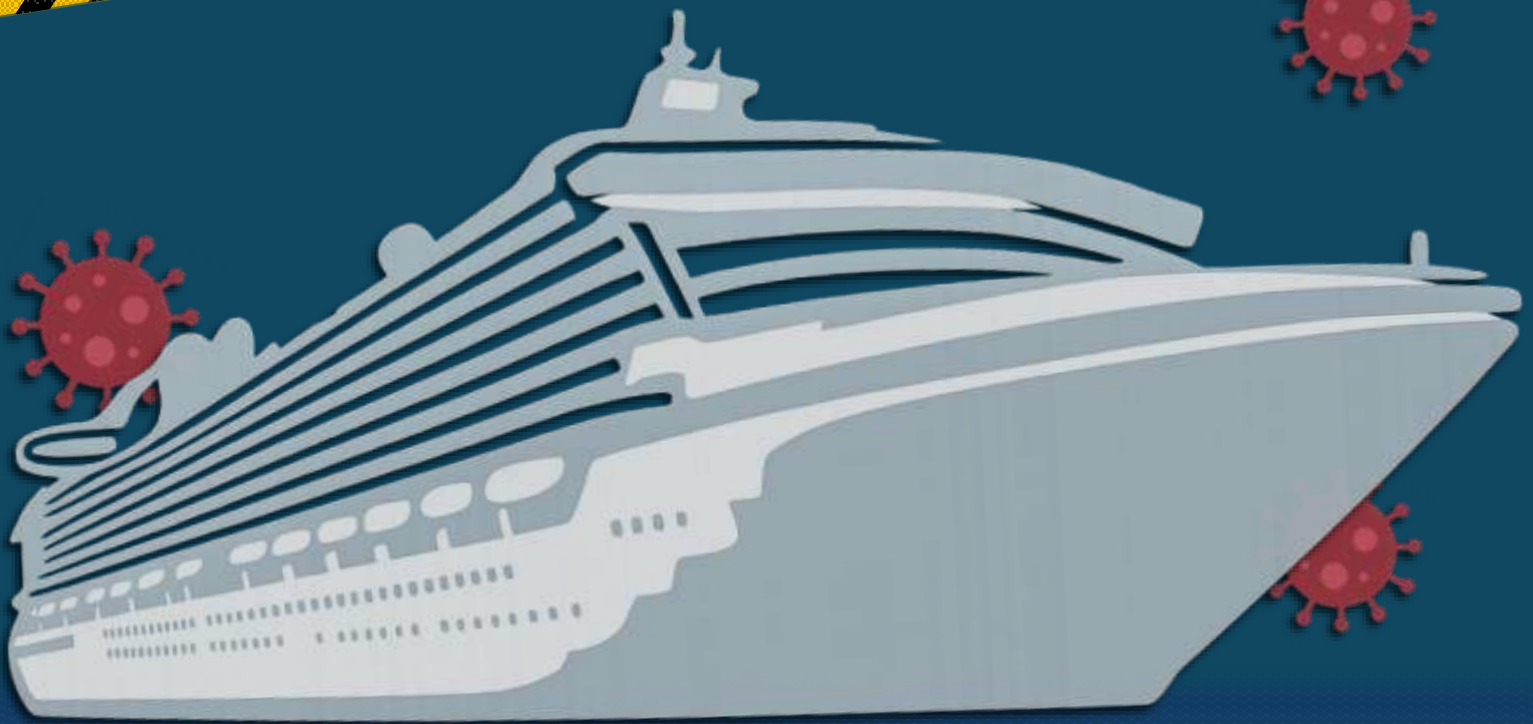
長崎大学熱帯医学研究所
附属熱帯医学ミュージアム

ダイヤモンド・ プリンセス号 の長い航海

ー 記録と記憶の継承と創造 ー

COVID-19

COVID-19



ダイヤモンド・プリンセス号の長い航海 ー 記録と記憶の継承と創造 ー

(第1回企画展の概要、2025年2月～8月)

ごあいさつ

長崎大学熱帯医学研究所附属熱帯医学ミュージアムは、2008年4月の開設以来、寄生虫・細菌・ウイルスなどを病原体とする熱帯感染症やNTDs(顧みられない熱帯病)の特徴、感染経路や媒介動物の生態をパネル・標本・動画で解説し、研究所の研究活動を伝えてきました。

第二次世界大戦後、日本は衛生環境の改善や予防接種の普及、栄養水準の向上によってさまざまな感染症を抑制することに成功し、「長寿社会」を実現しました。こうした中で、世界では依然として感染症が蔓延している地域もあり、研究所は海外拠点での活動などを通じて、感染症の抑制に向けた調査研究活動を行ってきました。

2020年、新型コロナウイルス感染症が世界を襲い、深刻な混乱をもたらしました。日本も例外ではありませんでした。それは、感染症の抑制に成功していたために、感染症を過去ものと意識していたからでもありました。新型コロナの日本への感染を人々に強く意識させたのが、今回の企画展でとりあげたダイヤモンド・プリンセス号での集団感染でした。

熱帯医学ミュージアムは、熱帯感染症に加え、新型コロナなどの新興感染症も対象として、資料等を系統的に収集することにしました。今回の企画展では、ダイヤモンド・プリンセス号の乗客の方が提供してくださった貴重な記録を展示しました。流行開始からかなりの時間が経過し、記録の廃棄や記憶の喪失が進む中で、ネクスト・パンデミックへの備えとして、こうした記録や記憶を保全、継承することは、熱帯医学ミュージアムに課せられた重要な役割だと考えています。

令和7年2月 熱帯医学ミュージアム

新型コロナウイルスのパンデミック

2019年～2023年前半、COVID-19が世界的に流行し、パンデミックを引き起こした。

タイムライン

2020.3.2 全国で一斉休校開始

2020.3.11 WHO、パンデミック宣言

2020.4.7 緊急事態宣言(東京)

2020.4.16 宣言全国拡大、その後、断続的に流行が続く、翌年にはワクチン接種がはじまる

2023.5.8 感染症法上の分類を季節性インフルなみに変更、事実上の「収束」とみなす

感染・被害状況

世界: 感染約7億人、死亡約700万人

日本: 感染約3,400万人、死亡約7.5万人

回復しても後遺症に悩む者も多い



台湾に定泊中のダイヤモンド・プリンセス号

報告書・検証の動き

UK COVID-19 Inquiry (2022～)

各国政府報告書

(デンマーク、オーストラリアなど)

長崎大学記録集『赤』と『青』



英国検証委員会HPのホーム画面

ダイヤモンド・プリンセス号の長い航海

DP号の船体・航路概要とCOVID-19感染後の横浜隔離の経緯

長崎で建造されたDP号

建造:三菱重工長崎造船所(2004年竣工)

全長:290m、高さ:54m、総重量:11.6万トン

最大収容人数:約2,700人(乗客)、乗員:約1,100人

就航:主に日本とアジア周遊コース

感染拡大の経緯

1月20日:香港・ベトナム・台湾等を巡航

2月3日:横浜港に帰港、感染者が発覚

船内感染者:計2,666人中、陽性は712人以上



船室のデッキから海を眺める乗客たち
(2月9日)

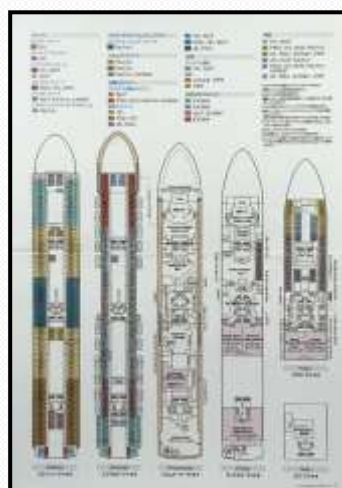
検疫と対応

2月3日 PCR検査で陽性者確認

各国の乗客:日本人1,281人、多数の外国人と乗組員

厚労省・自衛隊等が対応、乗客は船内待機状態へ

主な資料



検疫と治療のはざま

混乱した検疫・治療体制と乗客のストレス、外国人のチャーター機による帰国

混迷の背景

クルーズ船には日本の法律が及ばず、感染症対応のための明確な規則はありませんでした。船内の医師は2人だけで医務室は機能不全に陥りました。

高まるストレス

最終的に769人が陽性と確認され、乗客は長期間の隔離によって強いストレスを受けました。乗客の約3分の1が70代以上、80代超も200人超。医療搬送されたのは新型コロナ陽性者だけではなく、ストレス由来の心筋梗塞や脳梗塞の発症もあり、受け入れ病院の確保が必要になりました。

検疫と医療の相克

検疫継続か、医療搬送かという対応方針の対立(ジレンマ)が表面化しました。船内隔離による感染拡大防止に疑問の声があがり、水際対策(入国制限等)にも国内外から批判が集まりました。New York Times紙は、当時、「中国以外で最も感染者が多い場所」と報道しました。

チャーター機による帰国

米国政府は2月17日、328人を退避させました。その他のチャーター派遣国(計13か国・地域)は、韓国、イスラエル、オーストラリア、香港、カナダ、台湾、イタリア/EU、英国、ロシア、フィリピン、インド、インドネシア、で乗客904人、乗員671人、計1,575人がチャーター機で帰国しました。



夜間にも行われたチャーター機での帰国のための下船の様子
(2月17日)

ダイヤモンド・プリンセス号の日常

乗客は限られた自由の中で生活し、乗員は感染リスクのある業務に追われていました。2月19日から順次下船が始まり、3月1日に全員が下船したものの、13人が亡くなりました。下船後も差別や中傷が続く一方で、横浜では応援の声も寄せられました。



岸壁に書かれたさまざまな言語
による激励の言葉



乗員による配膳



医薬品のオーダー表と処方された薬の一例



乗船のためのクルーズカード



ランドリー・サービスの
カード



ランドリー・サービスの
のオーダー表

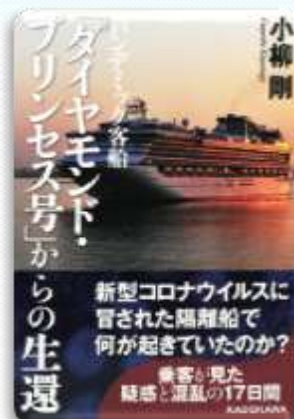


食事の記録



記録と記憶

DP号では、乗客代表の千田さんが政府の隔離対策に対し、「感染を防げず健康な人のリスクを高めた」と批判しました。薬の確保や医療体制にも問題があり、乗客からは不満の声が多く上がりました。こうした体験は回顧録にまとめられ、隔離の効果に疑問を持つ人が少なくありませんでした。



小柳剛著書の表紙



矢口栂子著書の表紙

DP号のレッスン

DP号での新型コロナ対応では、関係者と乗客の認識にズレがありました。厚労省は船長アルマ氏の協力を評価し、対応が円滑だったとする一方、乗客の一部は責任回避的な姿勢と受け取ることもありました。

DP号のさまざまな経験は、その後、長崎港で感染が発生したコスタ・アトランチカ号の対応に活かされることになり、コスタ・アトランチカ号では全員が回復しました。

DP号の教訓として、感染拡大時には全員の乗船が理想とされるものの、当時は受け入れ施設がなく、実現は困難でした。今後は、法制度やインフラの整備が不可欠とされています。



コスタ・アトランチカ号
(長崎大学広報戦略本部提供)



蛍光LAMP法の機器（長崎大学高度感染症研究センター 安田二朗教授提供）

(解説)

新型コロナのパンデミックをめぐる記録と記憶の継承と創造

飯島 渉

ダイヤモンド・プリンセス号の衝撃

新型コロナの記録

博物館の取り組み

2020年から全国の博物館が新型コロナ関連資料を収集・展示しました。北海道浦幌町立博物館では町民からマスク等を集め、吹田市立博物館は自粛ビラなどを集めて「新型コロナと生きる社会」のミニ展示&巡回展を実施しました。

国立歴史民俗博物館はこれらの資料に加え与論島の事例も展示する企画展を開催し、内藤記念くすり博物館は「ウイルスの世界—発見から2021年新型コロナウイルス」を開催しました。

国立歴史民俗博物館での展示解説の様子
(2024年11月29日 筆者撮影)



記録を残すための試み



大阪大学学園祭の展示
(2023年11月5日 飯島渉撮影)



台湾・国立成功大学でのワークショップ
「大疫考現学」の様子(2023年9月2日 飯島渉撮影)



記録と記憶の継承と創造